

# 街を行く

第50回 北九州 Kitakyushu

## 夢とロマンが作った国策の街

北九州と言うより「小倉」と言った方が小生にはしっくりとくる街です。思い浮ぶのは八幡製鉄所、森鷗外、無法松など、昔の記憶をたぐり寄せられるものが多いのですが、最近では地元アイドルイベントが盛り上がりつつあるようで、旬なトレンドもしっかり取り入れているみたいですね。小生はよく北九州の街を訪れるのですが、福岡（博多）を訪れた際にちょっと足を伸ばす“姉妹都市”のような感覚でしょうか。新幹線で博多からすぐという距離の近さが大きいですよね。

それにしても、海沿いを中心に広がる製鉄所はそのスケールといい迫力はもう半端じゃありません。明治維新後、富国強兵の下で日本の経済を支え続け「鉄は国家なり」といわれた理由が存分に理解できます。地元主力産業の盛衰に大きな影響を受ける街を企業城下町と言いますが、北九州市はまさしくそれ。とは言っても別格です。産業のスケールが大き過ぎ、受ける影響度合は他と比べものになりません。たくさんの企業がこの街から生まれているのもその影響でしょう。

街としての機能がほどよくコンパクトにまとまり、アクセスも優れています。小生のお気に入りには夕方の小倉城、市街地から川沿いに眺める城の姿は実に美しい。ですから訪れるのはいつも午後以降にしています。ちなみにお城の中には昔、陸軍の連隊があり、軍医でもあった文豪の森鷗外が勤務していました。その時の彼が書いたのが「小倉日記」。そして、一時その存在が行方知れずとなっていた時期、独自に鷗外の足跡を調べて日記の再現を試



迫力の製鉄所と、巨大な箱モノと、小倉城。時代の波に流されず、追い求めず、つくる街づくりを見たいものです。かつてのこの街のように

みようとした主人公を描いたのが松本清張の名作「或る小倉日記伝」であります。皆さん読んだことがありますか？ 実は小生も聞きかじりで知ってはいるものの、まだ読んでません。

もう少し街を歩いてみますと、地方都市ならではの“図体の割に中身が薄い箱モノ”が多く見受けられます。誰がそんな所に訪れるのでしょうか。もっと行政のお金の使い道はあるのですから勉強すべきです。かつて、本州につながる玄関口の門司から、近代産業の本拠地北九州を経て博多へ結ぶルートは九州繁栄のシンボルだったのかもしれませんが。しかし新幹線の発達で便利になったのは良いですが、中間を通り越すすべてが博多へ集中して行きました。

時代に波があることは仕方がないですが、街として大事なものも、それに流されて行ったのでしょうか。この様に街は時とともに役目が変わっていきます。役目をしっかりと果たせるよう行政はしっかりと、世の



中の動きをウォッチしなければなりません。さらに言えば、確固たる国家戦略によって考えなければ、街と街との相乗効果が生まれません。昔、鉄の街を作ったように、壮大な夢とロマンの街づくりを見たいものです。

### 南 一 弘



1982年大学卒業後、三井不動産販売に入社。ローンスター・ジャパン・アクイジションズを経て、2001年エートス・ジャパン・エルエルシーを設立。同代表に就任。2005年4月MID都市開発（旧松下興産）の代表取締役役に就任。2006年ジャパン・アセット・アドバイザーズを設立。同代表取締役役に就任。